



「チムとゆうかなせんちようさん」をよんで

猿楽小学校 一年二組 石橋 武知

「ふねがしずむぞ。ボートへうつれ、ボートへ！」

チムとせんちようののっているふねは、いわにぶつかってよこだおしになり、おおなみをかぶりました。

ぼくは、チムがふねにのっているときのきもちをかんがえると、とてもふあんになりました。チムはしんでしまうのかなとおもいました。ほんをよんでいるうちに、ちんぼつしそうなふねが、ほんとうにめのまえにあるようなきがしました。

つぎに、チムがせんちように、「わたしたちは、うみのもくずときえるんじゃない。」といわれて、ぼくはチムのきもちをかんがえると、しにたくない、とおもいました。

でも、チムは、「このせんちようといっしょなら、うみのもくずとなろうともかまわない」なんておもっていたので、ぼ

くは、とでもしんじられないきもちでした。

そのあと、せんちようとチムは、きゅうめいボートにたすけられました。もし、せんちょうといっしょにいなければ、きゅうめいボートはたすけにこなかったかもしれませぬ。ぼくは、せんちょうがいてよかったとおもいました。

ぼくは、さいきん、このおはなしのチムとおなじように、いきていてよかったとおもうことができました。

にっこうきついらくじこやひろしまのげんぼくのテレビをみて、いままでじこにあわずにいきていてよかったなとおもったときのことです。ぼくは、おとうさんとおかあさんといっしょにくらして、いまとてもしあわせだとおもいます。チムも、きゅうめいボートにたすけられたあと、おとうさんとおかあさんにまたあえて、ほんとうによかったとおもいました。